

かわのはなし

6. 鞣し（2）鞣し剤

川村通商株式会社 鍛治 雅信

鞣し、英語では tan 又は tanning と言いますが、その語源はゲルマン語の (Tanna) から来たと言われていました。

この言葉は、当時皮を鞣すために使用されていたオークやモミの木を指していました。その後、皮を鞣す事を表す言葉としての英語になったと言うことです。

この事からも解るように、皮を鞣すのには古くから植物が用いられています。

しかし、どの植物のどの部分を用いれば鞣しに適しているかは全て経験に頼っていました。

実際に植物のどの成分が皮の何処にどのように作用して皮が革になるのかが解ったのは、19世紀の半ばです。

植物に含まれるタンニンのフェノール性水酸基がコラーゲン線維のアミノ基及び部分的に荷電したペプチド結合と反応することで皮の鞣しが行われ革となるのです。

この事が解ってから、植物タンニン鞣しは急速に発展し、合成タンニン剤の発明やクロム等の重金属を用いた鞣し方法などが開発され現在に至っています。

古代から現在に至るまで、綿々と続いている植物タンニンによる鞣しも、その原料となる植物は時代と共に変化してきました。

タンニンの語源ともなっているオークやモミの木は、現在ではほとんど使用されなくなっています。

オーク木はイギリスなどで現在でも少量使用されていますが、その数量は統計にも表れません。

オーク木はヨーロッパに広く分布し、古くから皮の鞣し剤として、その樹皮を利用し、木部は樽を作ってビールやワイン、ウイス

キーの貯蔵に使用されています。

オーク材で作られた樽で熟成されたウイスキーが芳醇な色と香りを醸し出す理由の一つに、樽の木に含まれるタンニンがあります。

タンニンはポリフェノールの一種で、これがウイスキーの滓^{おりさ}下げ剤として働き、透明感や味に深みを与えます。現在でも、ワインやビールの滓下げ剤としてタンニンが利用されています。

このオークと言うのは以前から気になっている日本語訳の一つです。

日本語の皮革関連書物は非常に少ないですが、それでも鞣製学関連やタンニン関連の書物はあります。その中で、オークは英語のまま oak または日本語でカタカナのオークか漢字で榲(かしわ)と書かれています。

ところが最近の辞書では oak の訳を櫨(かし)、檜(なら)の類と書かれ、榲と言う言葉が有りません。

オークの日本語は櫨が一般化していますが、タンニン屋としては榲の字は残したいものです。

カシワと言うと柏の漢字を思い浮かべますが、柏餅も本来は榲餅の漢字を使用すべき物だと思います。

榲の木は人間の手の平に似た形で、神様にお供え物をする時に、手の平に載せて差し出す代わりに使用される物でした。神社で祈る時に打つかしわ手もここから来ています。秋に枯葉となっても、翌春に若葉が芽吹くまで枝に留まる事から、世代交代まで家を守る例えとして、江戸時代には武家の庭によく植えられていました。

榲の木は今でも東北から北海道にかけて広く分布しています。

明治時代の後半に、我が国でも富国強兵の為に自国での皮革工場が作られ、＜日本皮革＞や＜山陽皮革＞などの大型工場が操業を開始し、その原料となるタンニン剤をこの櫨の樹皮に求めました。

当時の北海道に群生する櫨木の樹皮からタンニン剤を得るため、現地にタンニン工場を作ったのですが、たったの2年でその地域に育成する樹齢80年以上の櫨木を全て伐採しつくしました。

植林にも失敗した為、その後は櫨樹皮を用いた革作りは途絶えています。

オーク木もこれと同じ運命を辿っています。

イギリスでは、18世紀半ばから始まった産業革命により人々の生活は豊かになり、中産階級が激増しました。

当時まで牛は貴重な労働力で、それを食べる事などなかなか出来ない事でした。

ところが産業革命により新たな動力源が發明され、牛の動力に頼る必要がなくなりました。すると、イギリスの中産階級がこぞって牛肉を食べるようになったのです。

動力としての使命を終えた牛は、食材としての地位を獲得していったのです。

牛肉を食べれば必然的にその皮が出ます。

当時のタンナーは羊や鹿などの中動物の皮を中心に鞣しを行っており、牛の皮は時々しか出ないので、タンニン剤の供給も問題ありませんでした。しかし、急激に牛の様に大きな皮を鞣す事となり、多量のタンニン剤が必要となりました。

この辺りからは想像が付くと思いますが、ヨーロッパではオーク木の伐採が続き、終にはオーク木が消え、それに代わる木を求めてタンニンの新素材探しが始まります。

オーク樹皮の代わりに目をつけられたのがチェストナット木です。この木は樹皮ではなく木部にタンニンを多く含んでいます。

フランスのリヨンと言えば絹織物で有名な所ですが、ここではチェストナット木からタンニンエキスを抽出し、絹の増量剤として、

または黒色染色剤として使用していました。

絹は重量で売買されているので、絹の品質を変えない程度の増量剤としてチェストナットエキスが使われていました。これは現在でも同様ですが、今では植物タンニン剤の代わりに合成タンニン剤が使用されています。

余談ですが、このリヨンに絹糸を輸出していたのが、世界遺産になった富岡製糸工場です。

植物タンニンは鉄イオンなどの金属イオンと反応して黒く発色します。

リヨンでも絹糸にチェストナットエキスを含浸させた後に鉄イオンと反応させて黒く染めていました。

昔の壺に入ったインクなども植物タンニンエキスをを用いた物です。

このチェストナット木もオーク木と同様の運命を辿っています。

チェストナットの木の実はマロングラッセでお馴染みの栗で、当時の木は樹齢80年～100年ぐらいの木が中心だったと言われています。オーク木の代わりという事で、次々と伐採され今では古木の枝の直径が15cm以上になった物を切って使用しています。特にイタリアの革底靴が流行すると、需要が急増します。

このチェストナットも価格上昇と原料不足から代替えを探し、次に候補に挙がったのがミラボラム、またはミラボランと呼ばれるタンニン剤です。

これはインド・スリランカ原産のテルミナリアチェラブラと言う木の実から採取します。独特の香りを持つタンニンで、チェストナットの代わりとして使われる物です。

元は植民地と言う事もあって、イギリスでの使用が多いですが、果実を乾燥させ、その果肉からタンニンを抽出するので、これまでの例の様に伐採し尽くす事はありません。しかし、果実の事なので、毎年豊作とは行かず、収穫量に増減はあります。